Athena Library of Life Writing

研究の新たな視点を切り開く資料集

"Life Writing" とは比較的新しい言葉ですが、個人的な人生について語ったものならおよそなんでも含まれてきます。自伝や評伝、回想録、日記類、手紙、あるいは旅の記録など、文字ものばかりでなく、口述されたものもその対象です。

人は、社会の中で暮らすことで常に二面的な要素を持ち合わせているといえます。自分自身が考えるパーソナリティと他者が見ているパーソナリティ、自意識としてある自分と社会的立場において知られる自分、さらに人生を重ねる中で変化する自己認識。Life Writing に表現されている人生は、実はその文章に収まらない複雑な深みを有しています。そうしたことが注目されて、欧米諸国で有益な研究対象と考えられるようになりました。

アティーナ・プレスではこの Life Writing について継続的に刊行してまいります。職種、ジェンダー、階級、人種、歴史事項、特定の時代など、設定したテーマに沿って著作・資料をセレクトして復刻いたします。

世界で取り組まれ始めているこの新しい研究分野についての資料をぜひお揃えいただき、各研究分野において広くご活用いただければ幸いです。

Athena Press

Part 1, Volumes 1–8

19世紀末イギリス舞台女優

ISBN 978-4-86340-050-4 • 全8巻＋別冊解説 • 2010年11月刊行 • セット定価（本体133,000円＋税）

別冊解説　河内恵子（慶應義塾大学教授）

『Part 1: 19世紀末イギリス舞台女優』について

ヴィクトリア朝時代を通して、舞台は女性を強く惹きつける独特の魅力を持っていました。

舞台は女性に開かれていた数少ない職業の一つで、家庭から出て経済的に自立し能動的な人生を送る可能性を与えてくれる場でした。さらに言えば、夫の付け足しとして家庭の中で「辛抱して、おとなしくしている」かわりに、公共の場での「声」「自己表現」を与えてくれる主体的な場所であったのです。

当時、社会に出て職業に就いていた「進歩的」な女性たちから見ても、女優たちは、より一層の自由を享受しているようで、自らの願望を実現する独立した女性の象徴とみられるようになっていきました。19 世紀には国際的に活動する女優もでるほどで、ほかにも劇場経営に乗り出す者もいて、財政的にも芸術世界においても実力を備えるようになり、社会的エリートに近づくこともできました。いわば現代の「セレブ」の文化がここから始まったと考えることもできます。

1843 年英国劇場法による演劇法制の再編、都市人口の急増、教育の進歩、識字率、交通などの様々な要因により、エンターテイメントへの欲求は飛躍的に増大するところとなりましたが、中でも舞台はその中心にありました。劇場の数は飛躍的に増大し、それに伴って俳優の数も増えるべき状況にありました。そこに 19 世紀後半における、いわゆる「女余り現象」や家族制度的だった劇団運営の変化、社会的制限の緩和などが複雑に絡み合い、パフォーミングアートの世界に入ってくる女性の社会的背景も大きく変わってきます。このころ中間層や下層階級から出てきた女優が増えてきており、この時代によく語られた「ぼろから富へ」という可能性をもたらしていたのです。さらに、女性を主役にした舞台作品の増加に加え、女性によって書かれた作品の増加も特徴で、最近の批評では「新しい女」の幅広い文化的重要性や、文学また演劇の世界での女性参政権運動との関係に対して注意が払われています――たとえば、Actresses' Franchise League（1908 年設立）や Pioneer Players（1911 年設立）は、1880 年代や 90 年代に女優たちが主導したいわゆる「イプセンキャンペーン」の結実だったのです。

そんなわけでヴィクトリア朝の大衆が、女優たちのありのままの「進歩的な」生きざまを描いた人物評あるいはゴシップなどにまでだんだんと興味を示すようになって、彼女たちの様々な二面的な生き方に好奇心を抱いていったのでした。男性が書いた、もはや旧式といってもいいヴィクトリア朝的価値観に包まれた女性を演じて見せながら、一方でそうしたスクリプトを書く男性たちに対してインスピレーションを与え、ひいてはその作品に影響をもたらしていること、舞台に出るなど外見上自由に見えても、家庭内では妻や母としての立場に縛られていること、雑誌や新聞に取り上げられるなど自立して見えるものの、実際のところ社会で立ち回っていくために男性の俳優や経営者、批評家に支えられていること…。舞台での演技に加えて、女優たちの自伝は、観客や聴衆に対して自分自身の真の姿を「上演」してみせる特別な役割を担っていたものともいえます。

研究者 Ellen Donkin は、このテーマを以下のように捉えています。すなわち 'the history of women's performance is the history of a struggle for a subject, rather than an object, position in representation' と。

女優たちの自分語り

河内 恵子●慶應義塾大学教授

19世紀後半のイギリスでもっとも人気のあった劇作家はオスカー・ワイルドである。そして、女優たちへの愛と信頼を、作家としての人生をとおしてもっとも率直に語ったのもワイルドである。

「すべてのすぐれた演劇作品は詩人の夢と役者の経験知の融合です…台詞があなたの情熱によって新しい輝きを放ち、あなたの唇によって新しい調べを奏でる。そのようにして私の作品に生命がふたたび吹き込まれるのを見たいのです。」

これは26歳のワイルドが女優メアリー・アンダーソンに語った言葉である。女優を芸術家として扱い、書く者と演じる者との結合がすぐれた作品を創り出すという信念を持ち続けたワイルドは、当然のことながら、作品を提供するという「与える側」だけに立っていたわけではない。女優たちから多くを「受ける側」にも立っていたのだ。メアリー・アンダーソンの他に、マリー・プレスコット、エレン・テリー、リリー・ラングトリー、サラ・ベルナールといった圧倒的な存在感を放つ女優たちから、台詞や所作に関するアイデアを得て、人物造形に役立てていた。オスカー・ワイルド以外にも多くの作家たちが、ワイルドほど意識的にではなくとも、女優たちとの「相互作用」という経験を創作に活かしている。

『オックスフォード英語辞典』によるとイギリスにおいて“actress”(女優)という言葉が“a female player on the stage”(舞台上の女の演技者)という意味ではじめて使われたのは1700年のことだが、実際にプロフェショナルの女優が舞台に登場したのは1661年だとされている。17世紀に登場した女優たちは多くの人びとの憧れの対象ではあったものの、他方では、娼婦と同等に扱われる場合もあった。18世紀には、キャサリン・クライヴ、エリザベス・グリフィス、イライザ・ヘイウッドなど、「演じること」から「書くこと」に転じる女優たちが複数出現した。舞台上で観たい作品を女優たち自身が創作したのだ。なかにはプロデュースを手がける者もいた。

大英帝国として世界に君臨した19世紀には、国民のアイコンとして絶大なる人気を誇る女優が登場した。また、演劇の国際化が進み、イギリス国内だけで演じるのではなく、ヨーロッパやアメリカに巡業に出かける女優たちもいた。逆に、アメリカやヨーロッパからイギリスにやって来る女優たちも多かった。このように、時代とともに、女優の仕事のありかたはさまざまに変化したが、プロフェッショナルな立場だけではなく個人の立場にある時、女優たちは何をどう語っていたのだろう?

作家が創作した役柄と舞台空間から離れた女優たちの言葉に私は深い興味を抱いている。公的空間と私的空間をきわめて鮮明なかたちで生き分ける、あるいは、それらの空間を敢えて区別せずに生きる、彼女たちの思いと語りは虚構と現実のあいだを彷徨する作家たちの姿に、これまでの文学研究が示すことがなかった新しい光を射すからだ。

「彫刻家の夢は大理石のなかに冷たく静かに刻まれる。画家のヴィジョンはキャンバスの上に静止する」が、自分の演劇作品は女優の力と技と情熱によって生命力を与えられ、動くのだ、と信じたワイルドのナイーブな言葉に女優たちはどのように反応していたのだろうか? ワイルドに限らず、作家と作品と女優の関係を知ることは、作家と作品と私たち読者・観客の関係のありかたを考える機会となるだろう。

Athena Library of Life Writingという大きな企画の最初に「女優たちの自分語り」が位置している。舞台を下りても(いや、下りているからこそ)饒舌な彼女たちの声を聞いてみよう。刺激的である。

Volume 1: Theodore Martin *Helena Faucit (Lady Martin)* (1900)

ISBN 978-4-86340-051-1 • 428 pp., 5 pl. • ¥18,000+税

Helena Faucit (1814–1898)

俳優の両親の元、ロンドンに生まれる。相当な美人で魅惑的な美貌の持ち主とされる。ヴィクトリア女王、ロイヤルファミリー、貴族階級に気に入られた。シェークスピアの再演ものと新しい詩劇で好評を得る。

シェークスピア劇の女性登場人物に関しての批評でよく知られたものがある。自伝は残っていない。本書は、アルバート公の伝記も書いて爵位を受けた、彼女の夫によって書かれた伝記。

Volume 2: Ellen Terry *The Story of My Life* (1908)

ISBN 978-4-86340-052-8 • 398 pp., 88 pl. • ¥21,000+税

Ellen Terry (1847–1928)

当時の代表的なイギリス女優として評される。劇団一家に生まれて9歳のときに *The Winter's Tale* の役をもらってデビュー。1864年のGeorge Frederick Wattsとの早すぎた結婚は1年しか持たなかったが、その事がラファエル前派をはじめとする芸術家の間で彼女が崇拝対象に。Oscar Wildeもその一人。1868年から1874年までEdward William Godwinと暮らすためにステージを離れた。Godwinとはのちに演劇界で顕著な活躍をすることになるEdithとEdward Gordon Craigの二人の子供をもうけた。

1878年、Henry IrvingのLyceum劇場へ所属、以来24年間在籍し36本に出演、7回のアメリカ興行を含む地方巡業にも参加した。のちに劇場経営にもわずかの期間関わっており、1925年のLyricでの最後の出演まで、イギリス内外への巡業や公演を含め、複数の劇場やミュージックホールで精力的に演じ、シェークスピア劇の録音、5本の映画への出演をこなした。

Bernard Shawとの往復書簡やシェークスピアについての講演が死後出版されている。彼女の著作は文章力や批評内容の評価が高い。自伝は、のちのちの編集者によって内容が書き変わっているため、ここでは初版の図版増量限定版を用いる。

Volume 3: Sarah Bernhardt *My Double Life: Memoirs of Sarah Bernhardt* (1907)

ISBN 978-4-86340-053-5 • 462 pp., 30 pl. • ¥20,000+税

Sarah Bernhardt (1844–1923)

フランス女優。国際的に活躍した女優としてこの時代においてもっとも有名。型破りで常軌を逸した行動によって伝説的な人物となった。1862年、Comédie-Françaiseでデビュー、1879年のロンドン公演の期間に正式に加入する。1880年のロンドン公演とブリュッセル公演でプロとしてのキャリアをスタートさせて、その年の後半に初めてのアメリカ公演も経験する。エキゾチックな場面設定、目も眩むようなコスチュームで特別に仕立てた感動的なメロドラマが評判を呼び、Bernhardtのロンドン公演は、1890年代まで毎年行われる定期開催となった。後に、彼女はいくつかの劇場を所有、経営した。またミュージックホールにも出演、レコード録音、映画出演もこなした。さらに、絵画、彫刻、詩、戯曲にも取り組み、そうした自作の演目にも出演した。アメリカの女性参政権論者に刺激を与え、現代世界に参加する女性が何を勝ち取ることができるかを示すシンボルとなった。

本書はフランスで刊行された自伝 *Ma Double Vie* が英訳されたもの。原著が刊行された1907年のうちに訳され、同年イギリスとアメリカ両国で出版されている。

Volume 4: Mary Anderson (Mme de Navarro) *A Few Memories* (1896)

ISBN 978-4-86340-054-2 • 276 pp., 6 pl. • ¥15,000+税

Mary Anderson (1859–1940)

アメリカ人女優。16歳でデビュー、1883年に初めてロンドンで演じる。1887年にはLyceum劇場で一人二役を演じた初めての女優となる。演目はシェークスピアの *The Winter's Tale*、役はPerditaとHermione。160回もの出演は先例がなかった。W. S. Gilbertの演目にもいくつか出演、そのうちの一つは特に彼女のために書かれたものだった。1899年ワシントンでの講演中にステージで倒れてしまい、これによって演じることからは引退、Antonio de Navarroと1890年に結婚してイギリスに居住する。彼女は、非常に美人で透き通った表現力のある声をしてい

た、と評されたが、硬いとか演技の幅が狭いとかの評価もある。ただ、一般的な人気は疑いようもなく、大変な好意を集めていた。

この復刻は彼女が出版した２つの回想録のうち、先に出版されたもの。引退して結婚まで（1890 年）が書かれている。

Volume 5: Lillie Langtry (Lady de Bathe) *The Days I Knew* (1925)

ISBN 978-4-86340-055-9 • 320 pp., 16 pl. • ¥15,000+税

Lillie Langtry (1853–1929)

ジャージー島出身、のちにジャージー・リリーとして知られるようになる。20 代初めに結婚してすぐ、ゴシップにまみれた「セレブ」としてロンドン社会で目立った存在になっていく。美貌と恋愛遍歴、特に 1877 年から 1880 年にかけての皇太子（のちのエドワード７世）との関係で有名。1881 年、Hugo de Bathe と結婚した時に、当時バンクロフト夫妻が経営していた Haymarket Theatre の *She Stoops to Conquer* に出演して女優として再出発、その後すぐに自ら主宰する劇団を設立、ロンドンを中心に活動し 1899 年までアメリカへもよく巡業した。（1897 年アメリカ市民権を取得。）

のちにカリフォルニアでワイナリーを経営、大きな競走馬育成牧場を保有、最後は引退してモナコに住んだ。演技力よりもゴシップで名を馳せたが、上流階級を演じたものに真価があった。彼女の回想録として唯一のもの。

Volume 6: Arthur Symons *Eleonora Duse* (1926)

ISBN 978-4-86340-056-6 • 172 pp., 3 pl. • ¥12,000+税

Eleonora Duse (1858–1924)

有名なイタリア人女優。国際舞台で活躍した偉大な悲劇役者の一人。旅芸人一家に生まれ厳しい不遇の子供時代を過ごし、幼少時から舞台に立った。ジュリエットのような主役を演じるようになった 1872 年以降、国際的に名高い女優になり、1887 年に自身の劇団を発足させ、1893 年 Lyric で初のロンドン公演を行う。以後 1894、1895（この年 Bernhardt も同じ作品を演じている）、1903、1904、1923 にそれぞれ公演を行う。彼女はイギリスのバーナード・ショウやアーサー・シモンズらをはじめ各国でかなり高い評価を受けており、チェーホフやダンヌンツィオら作家たちの着想の源でもあった。イプセンの戯曲に意欲的に取り組んでおり、1890 年代の終わりごろから引退する 1909 年までイプセン作品では主役を演じた。1921 年から再度劇場に姿を現したが、1924 年アメリカ公演中のピッツバーグで死去。彼女は情緒を前面に出す役においても内面に深く入り込んでいく役においても等しく高い評価を受けた。特に自己矛盾をはらむような役において評価が高かった。彼女の謎めいた横顔は一般大衆も批評家達も等しく関心を寄せ、彼女の存在は生前から伝説となっていた。自伝は残しておらず、ここでは死後間をおかずに出版されたアーサー・シモンズの彼女についてのエッセイ集を取り上げる。

Volume 7: Elizabeth Robins *Both Sides of the Curtain* (1940)

ISBN 978-4-86340-057-3 • 342 pp., 1 pl. • ¥16,000+税

Volume 8: Elizabeth Robins *Theatre and Friendship: Some Henry James Letters* (1932)

ISBN 978-4-86340-058-0 • 312 pp., 4 pl. • ¥16,000+税

Elizabeth Robins (1862–1952)

アメリカ人女優。1889 年にロンドンを訪れたのち人生の大半をイギリスで過ごす。ロンドンの演劇界にイプセンを紹介した人物とされている。イプセンの戯曲に多く出演しただけでなく初回上演から権利関係を取り仕切った。非常に知性の高い女優で、オスカー・ワイルドやバーナード・ショウ、ヘンリー・ジェームズ、ジョン・メースフィールドといった当時のもっとも有名な作家たちからも支持を受けていた。影響力のあった批評家ウィリアム・アーチャーとは一緒に New Century Theatre を設立し、女性が演じるのに適切な役があれば、ヒットの見込みが低い作品でもそれをどんどんイギリスに紹介した。

1902 年にステージを降りたあとは完全に文学に集中した。小説、短編、戯曲等の多くの作品を生み出し、そのテーマは女性参政権、嬰児殺し、自殺、売春など、しばしば社会の問題に迫るものだった。

また Women Writers' Suffrage League の 初代会長となり、フェミニストや人権主義的活動を支援した。

彼女は、長きにわたる友人で女性医師 Octavia Wilberforce とともに暮らしたブライトンで死去。1940 年の自伝に、本人の注釈が入ったヘンリー・ジェームズとの往復書簡を加えて復刻。